

東京五輪で日本を活性化

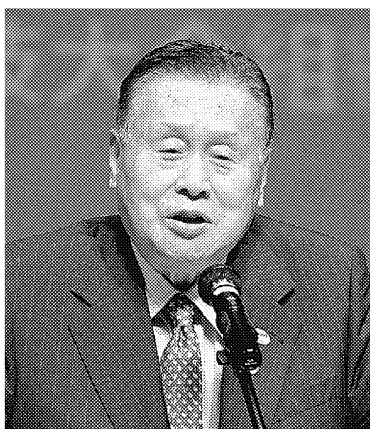
東芝国際交流財団、日本経済新聞社、日本経済研究センターは3日、「2020年へ、日本は世界に何を発信できるか」と題するシンポジウムを東京・大手町の日経ホールで開いた。2020年の東京五輪・パラリンピック、その前年のラグビーワールドカップ（W杯）など海外に注目され、日本から積極的に対外発信する機会をどう生かすべきだろうか。そして世界にその魅力を訴えるために何が必要か、国内外の識者が講演、討論した。

森 喜朗氏

東京五輪招致の際のスローガンは「Discover Tomorrow」だった。招致成功から1年たった今、組織委員会では2020年の五輪開催を通じて何を、どんな「Tomorrow」を目指すのか、3つの視点から取りまとめている。最も重要である。第1はアスリートの視点だ。選手が最高の結果を出せる環境をどうつくるか。

日本の真心を世界へ

来賓スピーチ



だ。日本人は謙虚で控えめであり、そんな気質は外国人から必ずしも良く評価されていなかったが、五輪は日本の真心を世界に知ってもらう機会になる。スポーツは人を変え、世界を変える。日本の多くの方々の英知を五輪に注入したい。

「2020年へ、日本は世界に何を発信できるか」シンポジウム特集

パネル討論



左から鳥、岡村、大田、本川、間野の各氏（3日、東京・大手町）

司会（鳥氏） 「東京五輪が開かれる2020年を一つの節目に日本が成熟国として対外発信していくための課題をどう考えるか」

岡村氏 「日本に元気がないと言われてしまう大きな理由のひとつは、どこに向かっているのか、どんな国になりたいのかという国民的コンセンサスが得られていないことだろう。国家像を明確にするための議論を政財界でやるべきだ。この機会を逃すと、再び失われた20年に戻るのではないかと心配する」

「我々の大きな財産は日本人の感性、ソフトウェアといわれる人を引きつける力、イノベーションの能力の3つだ。このうちイノベーションの能力を巡って、小中学校での理数系教育は、低く、経済協力開発機構（OECD）加盟国の平均を下回り、米国の6割の水準だ。裏返せば、日本にはまだ伸びる余地がある。弱いところの経営資源を、成長する分野にもっと移すことが必要だ。日本は変わる余地が余りに多い」

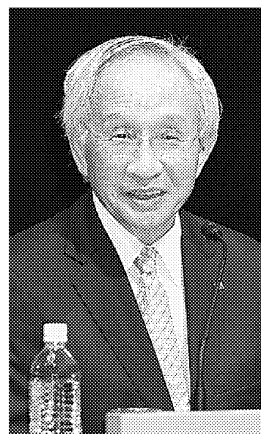
間野氏 「国際オリンピック委員会（IOC）には204年の国と地域が参加しているが、まだ1つもメダルを取ったことがない国が74ある。カンボジア、ラオス、ミャンマーなど近年、日本が関係を深めている国が含まれる。これらの国のために日本がメダリストを養成してはどうだろうか。将来の産業連携も視野に、敬愛される国を目指す道もあるだろう」

本川氏 「国際統計をみれば、日本人には世界に誇れる資質が多くあるのに、あまり自覚されていない。例えば、先進国の中では最も肥満の比率が低い」

「成人の読解力、数的思考力をみるOECDのスキル調査では日本の平均点が一番高い。成績の良い人と悪い人の差は非常に小さかった。文部科学省は学校教育、生涯教育の成果だと言っているが、九九を含め昔ながらのやり方も影響しているのではないかと。産業としてお金を稼ぐことにつな

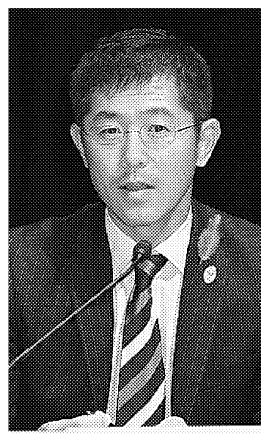
市場参入促す魅力を 岡村氏 大田氏 成長分野に資源移す

東芝相談役



岡村 正氏

早稲田大学教授



間野 義之氏



大田 弘子氏

政策研究大学院大学教授



本川 裕氏

アルファ社会科学主席研究員

途上国にメダル支援 間野氏 本川氏 世界に誇る資質多い

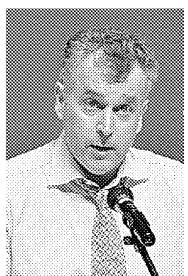
機会を利用し、人々を呼び込み、信頼関係を形成し、世界に人脈を広げた。東京五輪が決まり、日本に関心があり、来たいと思う人が増えている。言葉の問題はあるが、この有利な状況を活用すべきだ」

本川氏 「今はグローバルゼーションで世界全体が一つの島国のようになっている。日本人は自信を失った。日本人は自信を失ったと決めつけず、日本の国民性を生かす場面も考えに入れ、研究していくことが重要だと思ふ」

間野氏 「英国はロンドンに五輪を招致し、開催する過程で自国と世界のビジネスパーソン同士を会わせ、ネットワークづくりを進めた。世界から注目されるはずがない。大事なのは政府が邪魔をせず、民間が成長の種のある分野を探し、良いパートナーを探して存分に活躍できるように、阻害要因を取り除くことだ」

鳥 信彦氏
司会・東芝国際交流財団 審査委員長

日本の役割、議論に期待



英ケンブリッジ大学アジア・中東学部准教授
バラク・クシュナー氏

日本の対外広報は成功してきたと言っている。ラーメンをはじめとする食や、ファッション、漫画キャラクターが席巻し、欧米では日本が本当に愛されている。ただし、国際社会は1990年代以降、日本が経済分野だけでなく政治分野でも、より積極的な役割を担うよう働きかけてきたが、日本が新たな責任を負うことに成功したとはみられていない。

教育におけるグローバル化の方向も疑問だ。英語で教え、英語で学ぶことが重要だ。

日本がどのような価値観や理念を持つ国であり、それをどのように世界と共有したいと考えるのか。日本国内の議論が東京五輪に向けて盛んになることを期待する。

講演

タイタマサート大学教授・東アジア研究所長
キティ・プρασートスック氏

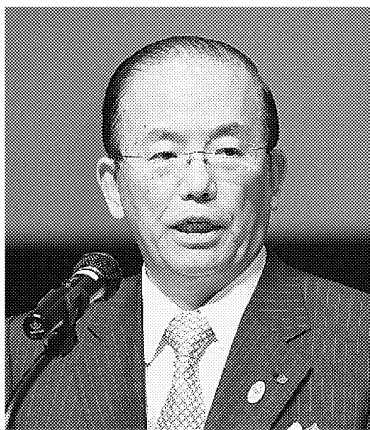
高齢社会の視点必要

個人的な意見になるが、2020年に開かれる東京五輪について、世界は「高齢社会で行われる大会は何か違うのか」という視点を持っていると思う。

そこに答えを出すのも我々の役割ではないか。20年から数年あるいは十数年たった時点で、日本が高齢化を乗り切り、新しい発展のステージを切り開くことができた。

は、東京五輪からだったと振り返って語られるならば、素晴らしい。今、組織委員会では20年以降に残すべきレガシー（遺産）の候補を取りまとめている。

総括コメント



東日本大震災からの復興と平和な社会への貢献、日本の価値観の発信など「復興と世界に向けたアピール」というレガシーも入れる方針だ。

大会を真の意味で成功させるためにオールジャパン体制で取り組んでいきたい。

強いソフトパワーそろそろ



アジアの経済成長には、日本の影響が大きくなり、とりわけ東南アジアの国々は、日本の投資がなかったら、これほどまでに発展しなかった。日本国民は少し落ち込んでいる印象を受ける。だが、日本はまだ強い要素、自慢できる要素がたくさんある。日本製品は、気配りが行き届いて、ユーザーにとっても優しい。生活を革新する力があり、来日するたびに新しい発見がある。

国のソフトパワーは文化、価値観や考え方、そして外交の3つで構成されるという。日本は全部そろっている。

2011年の大震災の際、タイでは日本は友達だ、日本を助けたらいいということで、盛んに募金活動が展開された。スラム街でも募金活動が行われた。日本はアジアの国々の友好国だ。日本には本当に元気があってほしい。